

「30日間セルフチャレンジキャンプ！」 ～踏みだそう！最初の一步～

平成23年9月1日(木)～30日(金)

協力：社会福祉法人野菊寮，御殿場市乗馬普及振興センター，かつまた牧場



I 事業の背景 (必要性)

ニートや不登校と呼ばれる若年者が増え，社会問題になっている現在，こうした人への自立と就労支援がますます重要となってきました。

また，こうした問題の背景として，若年者の自立心や忍耐力の欠如，コミュニケーション能力の不足などが指摘されています。

そこで，共同生活体験，労働体験等を通じて，社会人，職業人として必要な基本的能力を獲得したり，勤労観の醸成を図りながら，働くことについての自信と意欲を高め，就労へ導くことを目的として本事業を企画しました。この事業の取り組みは，本年で7年目になります。

II 事業の概要

1. 趣 旨

ニートやひきこもりなどの課題を抱える青年が，30日間という長期に渡る寝食をともにした共同生活を送りながら，福祉作業所での奉仕活動や酪農家での勤労活動，そして，富士登山等の活動を通して，自分に自信をもつこと，他者とコミュニケーションをとれるようになることを目指し，自立への契機とします。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

ニート，ひきこもり，不登校の状況にある16歳以上の青年，10名程度

(2) 参加者

<年齢・性別>

<参加地域>

	男性	女性	合計
10代	0	1	1
20代	1	0	1
30代	2	1	3
合計	3	2	5

静岡市	1
浜松市	1
三島市	2
御殿場市	1

(3) 広報の方法

①実施要項，募集案内の送付

- ・不登校・ひきこもり等支援施設
- ・就労支援団体
- ・静岡県内高校・短大・大学，および近隣県の短大・大学
- ・福祉センター
- ・児童相談所

②県内報道機関への実施要項配布

③直接訪問

- ・全国引きこもり KHJ 親の会（東京都豊島区）
- ・若者サポートステーション（静岡市，三島市）
- ・若年者就業支援センター（沼津市）

3. 日 程

- 8月27日（土） 事前説明会及び面接
9月1日（木） オリエンテーション
2日（金）～16日（金） 福祉施設での勤労体験
馬房での勤労活動
酪農家での勤労活動
17日（土）～23日（金） 自宅での生活
24日（土）～28日（水） 登山準備
2泊3日の富士登山
29日（木）～30日（金） 後片づけ，閉講式



4. 内 容（活動の様子）

（1）「社会福祉法人野菊寮」

- ①知的障害を持つ人が入所する野菊寮の体育館玄関，トイレ，窓枠のペンキ塗り作業を行いました。
- ②共同作業を行うことで，参加者同士の協力姿勢ができました。
- ③入所者とフォークダンスや昼食会，ハイキングの交流を行い，思いやりと他者への理解を深めました。

（2）「御殿場市乗馬普及振興センター」

- ①馬房の清掃，馬場周辺の草刈り，早朝の餌やりなどを午前中に行い，午後は乗馬の実習を行いました。
- ②動物の世話の大切さを経験しました。
- ③5日間の乗馬実習で，達成感を味わうことができました。



（3）「かつまた牧場」

- ①家族経営の牧場で，牛舎の清掃，稲刈り，サイロへの飼料の詰め込み作業を中心に行いました。
- ②乳牛飼育のために農作業が必要なことなど，仕事のつながりを勤労体験から学びました。
- ③家族の協力や役割分担を知り，共同作業の大切さを知る機会になりました。

（4）「富士登山」

- ①第1日は，富士宮浅間神社を出発して村山古道を経て，静岡県富士山麓山の村まで，第2日は，富士山麓山の村から宝永山荘まで，第3日は，宝永山荘から富士山頂を目指し，宝永山荘に下山後，交流の家にもどりました。
- ②早朝からの活動や長時間の歩行などを通して，困難を乗り越える意志を培いました。
- ③歩行ペースを遅い人に合わせるなど，他者を気遣う意識を高めました。

（5）「共同生活」

- ①二人一部屋で生活をしました。清掃と食事当番の分担を行い，自活意識を高めました。

- ②三食自炊の共同生活を行うことで、お互いの理解を深めました。
- ③起床から就寝までの規則正しい生活習慣を身につけました。
- ④毎日夜のミーティングを行い、自己を振りかえる機会と目標づくりをしました。



(6) 「自宅生活期間」

- ①一週間の自宅生活期間を設け、改善された生活を継続するようにしました。
- ②毎日の生活記録と反省を日誌に記入しました。
- ③今後の生活や進路・就業などを考えて、具体的に行動を起こすようにしました。

5. 評価

(1) 評価の方法

- ①アンケートの実施
共同生活、各ワーク活動、自宅生活などプログラムの内容と、30日間で身についたことや自分自身の変化について、5段階の評価と記述式のアンケートを実施しました。
- ②生活日誌の記入
起床時間、食事時間、就寝時間の生活記録をつけました、また、その日の活動内容及び反省を毎日記入しました。

(2) 結果

- ①アンケートの結果より
参加者からのアンケートには、「自分の乱れた生活が改善されて、体が軽くなりました」「生活習慣作りはいいことだ」というように、共同生活の中で生活習慣の改善が図られたことについての感想が多くありました。また、ワーク活動では、「なかなかできない活動をさせてもらった」「普段関われない人と話げできた」などの感想がありました。全体的にコミュニケーションや協力姿勢の向上を挙げていました。
- ②生活日誌より
起床や就寝時間、また、食事の取り方など、生活のリズムを守っているようすがうかがえました。毎日の生活にウォーキングを取り入れた参加者もいました。

(3) 成果

- ①自宅生活期間においても、共同生活で身につけた生活習慣を維持することができました。
- ②自宅生活期間中に、職場体験を行ったり、就業支援の施設に相談に行ったりした参加者がいました。また、期間終了後に、職場体験を行った参加者もいました。
- ③新たな高校を受験するという進路を選んだ参加者がいました。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- (1) 約半月が過ぎた時期に、一週間の自宅生活期間を設けました。この期間中に、半月間の生活習慣を保つ、あるいは、新しい活動に踏み出してみるなど、参加者に課題を持たせて自宅生活を送らせました。
- (2) 自宅生活中は、起床から就寝までの食事時間や活動など、一日の生活を記入する日誌

を作り、毎日記録をつけました。その日の生活反省欄を作り、一日の振りかえりをするようにしました。

2. 運営のポイント

- (1) 今回の参加者が5名であったことから、ボランティアを含めたスタッフの人数にゆとりがありましたが、10名の参加者があった場合、参加人数2名あたりに1名のスタッフが必要となります。
- (2) 長期事業であるため、スタッフの健康と負担を考え、参加者と共に行う勤労体験と共同宿泊はスタッフがローテーションで担当しました。
- (3) 専門知識を持ったカウンセラーに依頼し、参加者と定期的に相談できる環境を作りました。
- (4) 自宅生活期間に入る前に、目標づくりの個別面接を実施しました。

3. 今後の課題

- (1) 県外への広報を積極的に行い、広範囲から参加者を募集できるようにすること。
- (2) 心理・医療面で支援を得たり、専門的な研究を行う機関と連携を持つこと。
- (3) 就業支援のサポートが受けられる複数の団体と協同体制を作ること。
- (4) ひきこもりからニートまで、参加者個々の状況は幅広いが、参加者の対象を絞り込んだ有効的なプログラムとして完成させること。
- (5) 定期的に参加者の追跡調査を行い、事業の成果を長期にわたって分析すること。また、そのデータの蓄積を行うこと。

4. 参考資料

- (1) 参考文献やサイト
厚生労働省 ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2007/06/h0628-1.html>
- (2) 資料
 - ①アンケート用紙
 - ②実施要項
 - ③生活日誌

担当：加藤英樹，北見靖直，内海隆博